

ねりま小中一貫教育レポート

〇●〇 第 5 号 〇●〇

平成 24 年 8 月

発行：教育企画課・教育指導課

練馬区の幼保小連携・小中一貫教育をリードしていただく校(園)長先生方を対象として8月23日に研修会を開催しました。講師の千葉大学教育学部教授の天笠 茂先生には、11月の「ねりま小中一貫教育フォーラム」のコーディネーターもお願いしています。天笠先生の講義概要を紹介します。



◆小中一貫教育とは

「これまでの小・中学校の教職員の役割分担を見直し、9年間という時間を通して、子どもの成長・発達にきめ細かく寄り添い、協働して手塩にかけて育てていく取り組み」が小中一貫教育だと考えています。6年と3年に区切って指導を投入するのではなく、小学校の先生も中学校の先生も、9年間という時間で子供たちを見ていく。小学校を卒業したらあとはよろしく、ではなく、中学校に入ってきた子供をみて今まで何を教えていたんだ、でもなく、小中一緒に15歳までの子供を育てる気持ちをもつことです。

◆小中一貫教育をどこまでやるか、は中学校区で決める

小中一貫教育には、さまざまな形があります。中学校区のなかで、「教育目標」「めざす児童・生徒像」や「ランドデザイン」「教育課程」をどこまで共有するのか、あるいは共有まではしないで円滑なつながりを考えるのか、トップ同士の話し合いが必要です。小・中学校間の距離や連携する学校数など、それぞれの中学校区がもつ条件が異なるなかで、何をどうやるのかを中学校区の小・中学校で考えることになるでしょう。

◆コーディネーター役の先生は、だれに願います？

先行自治体における小中一貫教育のステップは、①「9年間のつながり」に問題意識をもつ ②小・中学校の先生方が一堂に会す（「まあ、一杯やりましょう」も効果あり）③授業交流や行事での交流（単発） ④交流が指導計画や教育課程に位置付けられ、計画的になる ⑤9年間の教育課程に基づく授業 と進んでいることが多いです。

第三ステップから第四ステップへ行く段階で壁があります。壁を乗り越えるひとつのカギは、コーディネーター役の先生です。教務主任や研究主任がコーディネーター役を兼任すると、忙しさのあまり小中一貫教育が後回しになる可能性がありますから、どういふポジションの人をお願いするかは考えどころです。

◆小中一貫教育で、先生方にどんな力がつか

小中一貫教育を進めていくと、先生方が9年間を見通す視野を獲得します。つまり、学校種を超えて、教育課程や指導方法、児童・生徒の発達が理解できるようになる、ということです。今は互いに見えていません。

小・中学校の先生方がお互いの授業を「あんな授業」と批判的にみていることがよくあります。実は成長の姿のとらえ方が狭いのではないか、子供たちがいろいろな変容を遂げながら次の成長があるのかもしれない、と考えられないでしょうか。

◆やらされる小中一貫教育では、アイデアは出ない

小中一貫教育は、目的ではなく、子どもの成長に寄り添う手段です。どんな形ができたかよりも、忙しいなか苦勞して、小中の先生方が話し合い理解していく、そのプロセスが極めて大切です。先生方が小中一貫教育を「やらされる」と感じているうちは、いいアイデアは出てきません。

ボトムアップで小中一貫教育を進めていくのが理想ですが、なかなか難しい。どうしたら先生方が主体的・自律的になれるか、ポイントのひとつは授業交流にあります。

◆小中一貫教育のポイントは授業交流

中学校の先生がもつ教材の解釈力・分析力、小学校の先生のきめ細かさや教室の環境整備のノウハウには、お互いに学ぶところがあります。

昔から、生活指導の連携はありました。生活指導の連携は基本です。生活指導の連携を踏まえて、カリキュラムや学力にまなざしを注ぐのです。実際に異校種の授業を見て、なぜそういう教え方をするのか、なぜそういう板書なのか、と疑問に思ったことを異校種の先生とやりとりすることが、授業交流の柱になります。

◆小中一貫教育で新しい組織文化を創る

小中一貫教育では、小・中学校の組織文化がぶつかりあう。ぶつかって、元の文化に収まるのではなく、新しい組織文化を創っていくのが小中一貫教育です。小・中学校の学校文化は、それぞれ何十年もかけてできてきたものですから、これから数十年かけて、新しい文化を創っていけばいいのではないのでしょうか。